加賀見山旧錦絵(かがみやまこきょうのにしきえ) 草履打(ぞうりうち)の段

勇ましき、かしこき神の神諌(いさ)め、折から告ぐる供廻り

尾上「いざ御立ち」

と、夕映えの、中老(ちゅうろう)尾上(おのえ)先に立ち、多くの女中が取り囲み、対の帽子も一様に群れゐる鷺の如くにて帰り、申しの鳥居前

尾上「いざお局(つぼね)様ご一緒」

と、言へど岩藤(いわふじ)不精々々立ち帰らんとするところへ⇩

来かゝる鷲(わし)の善六(ぜんろく)が両手を土に

善六「イヤ申し、お局様、最前申し上げうと存じましたれど、かのことに取り紛れましてハツタリと失念仕りました。エ、他の義でもござりませぬが、この間仰せつけられました金の儀で、へい〱お請け取り下さりませ」

と、半分言はせず

岩藤「コレ善六、この岩藤は局役、むさ苦しいもの取り扱ふ役ぢやない、その金は召使のサワに手渡ししや」

と、言葉数言はぬ色なる山吹きの包み取り出し

善六「ヤモウ神仏より尊う思ふこの金を、むさ苦しいものなどとお手に触れられぬと言ふはア、また格別なお歴々様、唸(うな)るほど金持つても町人といふものは賤(いや)しいものでござります」

と、言ひつゝ金を懐へお屋敷さして急ぎ行く

⇩跡打ち見やり局岩藤

岩藤「ナント尾上殿、町人には珍しいあの善六、町人は賤しいものと、感心した今の言ひやう、ヤ、コリヤほんにこな様には差し合ひであつたもの、オ、オホ、、、。わしとしたことが、つか〳〵と気の毒な、オ、オホ、、、。イヤナニ尾上殿え、こなさんの宿といふは金持ちなれど町人、仮親しての御奉公スリヤ今わしが言うたこと、気に障りやしませぬか」

と、味なところへ仕かける意地と、思へどわざとそらさぬ顔

尾上「これはまた岩藤様の痛み入ります御挨拶、なんの私が左様なこと。ガ仰る通り親どもがお出入りの縁をもちまして、かやうな重い御奉公もありがたい身の仕合はせ。根が町人の私がこと、さぞや不束(ふつつか)な事ばかりでござりましよ。この上とても岩藤様、憚(はばか)りながらよいやうにお指図頼み上げます」

と、柳ながしのしなやかに言ひ廻したる利発さよ

岩藤「オ、なんぢやえ、町人の娘御ゆゑ足らはぬことを指図してくれいかえ、ホンニつべこべ〳〵と薄い唇ぢやのう。なんのお前の御発明で、私が指図受けさうなことかいの。ついでぢやによつて言ひますが、こなさんの親御といふは、お屋敷のお金御用を勤めやるといふ、その用達顔の高慢が鼻の先へぶらつ

いてコレ、この顔に見えるわいの〳〵。イヤまた上（かみ）のこと言うぢやないが、金の威光はきついものぢや。この後とても、その金持ち顔止（や）めにして下され、ヤ、ヤ、や。お役向はお中老、この岩藤は局役、オ、お局役、お表ならば御用人格ぢやぞや。女ひと通りは勿論、万一狼藉者（ろうぜきもの）、盗賊などが忍び入る、サその時は役柄ぢや。女ながらも御前の固め、討ち止める器量がなけりや勤まらぬ奉公ぢやが、定めて長刀のひと手も心得がござらうの、スリヤあの誰に稽古なさつたぞ、イヤアノそのお師匠様はなんと言ひますえ、コレ尾上殿〳〵、エ、こな人わいの、人にばつかりもの言はせ、こなたは耳でも潰れたか」

と、噛み付けられて、尾上はたゞ赤らむ顔を押し隠し

尾上「お恥づかしいことながらその心掛けは」

岩藤「ないと言ふのか、アノ心掛けはない〳〵、オ、オホ、、、。皆の者あれ聞きや、重い役を勤めながら心掛けはないといの〳〵、オ、オホ、、、。マ我折れ。そりやアノなんぢやぞえ、オ、ほんにこれが禄盗人ぢや、オ、知行盗人ぢや盗人ぢゃ〳〵〳〵。なんとさうではあるまいか」

と、まくしたてたる雑言を、尾上は堪へ〳〵ても無念の涙保ちかね、歯を喰しばり堪へゐる

岩藤「ヲ、なんぢや泣かしやるか、オ、チト堪へう。町人の娘でも今では武家のご奉公人、オ、悔やしかろ、道理ぢや〳〵ほんにそうじやわいな。最前も仰

るには心つかぬことあらば、ご指南頼むと言はしやんしたの、ム、、ドレ教へてやろ」

と、立ち上がり、持つたる扇振り上ぐれば、身をかはして打ち落す、手向かひなさばひと打ちと懐刀（ふところがたな）抜き放せば、『これは』と驚く女中たち、尾上も今は堪りかね、ともに抜かんと立ち寄りしが、思ひ廻せば廻すほど大恩受けしご主人のご先途も見届けず、我が身に過ちあるならば、跡に残りし親たちの御歎きは如何ばかり、と堪へる辛さ苦しさは胸もはり裂く血の涙、身も浮くばかり嘆きしは、傍で見る目も哀れなり。

岩藤「ムウ相手にならぬはこの岩藤が恐ろしいのか。オ、恐ろしい筈、道理ぢや道理じや、そんならモウこりや納めましよ、ドレ〳〵帰りましょ〳〵。ほんにこなさんにかゝって、コレ見やしやんせ、足袋も草履も砂まぶれになったわいナ。イヤナニ尾上殿え、ナントこの草履の汚れたのを拭（ふ）いて下さんせぬか」

尾上「アノ私に」

岩藤「オイノ」

尾上「エ、」

岩藤「嫌か〳〵」

尾上「ぢやと申して、それがマア」

岩藤「それがマア、刃もの汚しせうよりは幸ひなこの草履」

と、足に掛けたる土草履、尾上が頭（かしら）テウ〳〵

女中「これは」

と、ばかり奥女中、気の毒あまり立ち騒ぐを、尾上は声かけ

尾上「ア、コレ〳〵騒ぐまい女中たち。岩藤様がこの尾上を御異見のためのご打擲（ちょうちゃく）、わしやありがたうて〳〵、母様のご折檻（せっかん）と思うてこの身の節々までありがとうて忝い。ホ、〳〵〳〵ホ、、、、。イヤ申し岩藤様、生みの親も及ばぬご異見、エ、ありがたう存じまする。この上は随分と武芸をも心掛けてご奉公をいたしませう。また、このお草履は私がためにはご教訓のこのひと品、申し請けて私が守り」

と、懐中したる心根は言はぬ色をやいひ草履、胸に納めし利発さよ

さすがの岩藤呆れ顔

岩藤「なんぢや、その草履をわしに貰うて守りに掛ける、アノ守りにヤ。テモ恐しい辛抱な人、異見した甲斐がある。以後をキツと嗜ましやれ。サア〳〵行きませう〳〵、お暇申さう」

と、替へ草履、心は後に尾上をば、にらみ廻して立ち帰る

尾上は跡を打ち見やり堪へ〳〵したため涙、一度にワツと伏し転（まろ）び、身も浮くばかり歎きしが

数多（あまた）の女中が立ち寄つて

女中「コレ〳〵申し尾上様。アノ憎体（にくてい）なお局の気質は常からようご存じ。お腹
立ちはお道理なれど」「いつものことぢやと思し召し、必ずお気にさへられず
と、先づ〳〵屋敷へお帰り」

と、諫め立つれば

泣く〳〵も抱へ引き締め立ち上がり、女心のひと筋にまた思ひ出だす口惜し
涙、はや寺々に暮れの鐘。明日は我が身も消えてゆく、夕告げ鳥の泣く〳〵も
打ち連れ、館へ